

風のように

甘木教会



主任牧師：崔大凡

牧会委嘱牧師：竹田孝一

死を永久に滅ぼしてくださる。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい 御自分の民の恥を地上からぬぐい去ってくださる。これは主が語られたことである。その日には、人は言う。見よ、この方こそわたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。この方がわたしたちを救ってくださる。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び躍ろう。

イザヤ書25：8－9

招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。

マタイによる福音書22：14

【説教要旨】

10月31日は、私たちの教会誕生の宗教改革記念日です。宗教改革は、ルターという司祭の「人はいかにすれば救われるか」という純粋な個人的信仰の葛藤から生まれたのです。純粋な個人の信仰の葛藤が世界を動かし、中世から近世への世界を開いていったのです。極めて純粋な個人的な信仰が深められた結果です。時代の大きな激動の中で、時代に応えるべき多くの人が神によって、招ねかれたのです。「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。」と。ルターは選ばれた人だったのです。先日、大変調子が悪く、かかりつけの医者には検査をしていただきました。気になるのは体のだるさと足に水が溜まることです。腎臓に水泡は出来ているが大丈夫でしょうという今の判断です。しかし、「元K市議会議員長のNが死去…73歳、市議を10期務める」というYahooニュースが目飛び込んできました。同窓生です。伊集院静の小説「春雷」に人間は、よくわからないが、分かっていることはひとつだけある、「どんなふう生きて

も人間は必ず死んでしまうわけだ。善人として生きても、悪人として生きても、いずれ死ぬんだな。」という言葉です。

10月は宗教改革の月で教会の創立者ルターの信仰について学んでいこうとお知らせをしていました。今日はルターの死についてです。1546年2月18日夜中、ルターは、三度目の発作を起こした。狭心症だろうと推察できます。医師は死の近いことを周りの人に知らせました。段々と弱っていくルターに古い学友のヨナスとコエリウスは、『先生、あなたは死に臨んで主・イエス・キリストに信頼なさいますか。あなたがみ名によって教えられた教理を告白しようとなさいますか』と大きな声で尋ねました。ルターは、「そうだ」としっかりした声で答え、眠ったように大きな息を吐いて、天に帰りました。出生地、洗礼を受けたアイスレーベンで1546年2月18日午前2時45分に帰りました。

死を前にして、告解、終油の塗油は行われなかったし、聖餐もなかった。私が注目したいのは『主・イエス・キリストに信頼する』ということに対して『そうだ』の一言で、信仰告白をしたということである。『我、ここに立つ』から始まったルターの信仰は、どこに立つかを告白し、最後までキリストによる栄誉を受けようと走りぬいた。

死を意識して生きている日々にあって、『あなたは死に臨んで主・イエス・キリストに信頼なさいますか。』という問いに『そうだ』と答え、死を超えたのです。

死を永久に滅ぼしてくださる。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい 御自分の民の恥を地上からぬぐい去ってくださる。

これは主が語られたことである。その日には、人は言う。

見よ、この方こそわたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。この方がわたしたちを救ってくださる。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び躍ろうという。主に信頼を置いた最後でした。「ルターは死を迎えるまで詩編31編6節『まことの神、主よ、御手にわたしの霊をゆだねます。わたしを贖ってください。』を繰り返し唱えていた。ルカによる福音書23章46節の十字架にかかり息を引きとった主・イエ

ス・キリストもイエスは大声で叫ばれた。『父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。』こう言って息を引き取られたのである。主・イエス・キリストが神を信頼して叫ばれた祈りにルターも合わせていたのである。ルターは、死に臨み、告解、終油の塗油、聖餐もなかった。しかし、死に臨みあったのは共にここにくださった主・イエス・キリストに信頼した祈りでした。

（死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。詩篇23:4 説教者が挿入）

ルターの死への姿勢は、『信仰のみ』というイエス・キリストへの深い信頼であり、宗教改革者の総仕上げでした。「ルターの死に関する報告の特徴を分析していくと、そこに『キリストのみ』『恵みのみ』『聖書のみ』『信仰のみ』という宗教改革的スローガンに対応した態度を見ることができる。・・・ルターがその死を通して、『中世的良い死』に代わる『プロテスタントの良い死』の模範を後世に残した」

（『ルターから今を考える』小田部進一 日本基督教団出版局）

主よ、あなたはわたしの神 わたしはあなたをあがめ 御名に感謝をささげます。あなたは驚くべき計画を成就された 遠い昔からの揺るぎない真実をもって。「真実」とはダイヤモンドのように固い私たちに対する神の愛です。ルターを、私たちを驚くべき計画ーイエス・キリストの出来事を通して、揺るぎない真実をもってー揺るぎない神の愛をもって、神は驚くべき計画を成就されています。死の最後まで神の愛に招かれた私たちです。ルターが「我、ここに立つ」といって宗教改革を始めたここ、神への愛へ絶対信頼に立つのです。人の力によって良い死を迎えようとするのでなく、死を永久に滅ぼしてくださる。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい 御自分の民の恥を地上からぬぐい去ってくださる。これは主が語られたことであるという主が語られたことに全信頼をもって良い死を迎える者、それが招かれる人は多いが、選ばれる人は少ないという少数者の私たちなのです。

安心して死を迎えましょう。

牧師室の小窓からのぞいてみると



情報革命の危険な中であって

「この世は今や全く憂いがなくなった。この世は（手にしている）書を信頼し、これを読めば、全てが分かると思いついでいる。悪魔は・・・・・・・・すべてが分かったふりをして夢想させる。安住しないようにわたしは常に祈り、神がその聖なるみ言葉でわたしたちを守ってくださるように、またこれに嫌気を起こさないように・・・・唱えて」

情報革命なしに宗教改革はなかった。ルターの時代は、印刷技術が発展して情報革命が起きたのである。

今、コンピューター、インターネットの普及、そしてAI（人工知能）は、新たな情報革命を起こした。AIによって、あたかもすべてが分かり、事を出来るように思う。しかし、ここに安住することは、ルターは、悪魔の業で、人を怠惰にすることにほかならないと言っている。

ルターはユーモアをもって「安住しないようにわたしは常に祈り、神がその聖なるみ言葉でわたしたちを守ってくださるように、またこれに嫌気を起こさないように日々教理問答書を息子のヘンスヒェンように唱えて」と私たちの本来の姿を示している。

園長・瞑想？迷走記。



教育、保育は、こども、保護者、教師、保育者、社会の人々と目の見えないもので互いに信頼する中で成り立っている。しかし、幼児教育、保育を巡る環境は、この原則を壊して、いま、法律で互いの信頼を立てようとしている。教育、保育の世俗化ということだろうか。

今、こども家庭庁が実行しようとしている法について研修に出れば、出るほど暗くなって帰って来る。人と人とが信頼するのは心が互いにひびき合うことではないだろうか。政府の庇護のもとから退場し、どこまでも互いに信頼し、法に縛られない認可外幼稚園を作りたいという強い思いが起きて来る。

日毎の糧

聖書：【賛歌。ダビデの詩。】主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。詩篇23：1



ルターの言葉から

神学にはただ一箇条と一つの規則しかない。それは真の信仰とキリストを信頼することである。

『卓上語録』M.ルター著、植田兼義訳、教文館

23篇は、「旧約聖書の真珠」と言われる。

詩編23編を読むとき、私たちは、自分の人生と容易に重ねることの出来る普遍性をもっている。そして、徹底した神への信頼で貫かれている詩は、私たちに深い安心感を与える。

絶対なる信頼感に貫かれている詩篇は、パレスチナ状況、歴史を生きた生活の営みから生まれたものである。

「パレスチナ状況、広くは砂漠の状況であろう。牧草地と水の乏しい地方において、か弱い羊はただ牧者の導きによって緑草を得、また水際に導かれる。また牧者の導きなくば、谷間に落ちて死んだり、猛獣に食い殺されたりする危険もある。そのような状況でこの詩は牧者として神を描いているのである。」

（「詩編注解」 関根正雄 教文館）

編者は、これをさらに明らかに示すために表題に「賛歌。ダビデの詩。」と加え、歴史を生きた生活の営みがより具体的になり、詩のもつ味わいを深めた。

ダビデの生涯は多くの欠乏、苦しみあって、神がダビデ（我々）の牧者なることを実感したと編者はみる。神が私たちの生涯を共に歩んでくださるゆえに「主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。」という事実が信仰者にはみえてくる。感謝。

祈り：豊かな信頼の心を与えて下さった神に信頼し死に至るまであなたに委ねていく信仰者にしてください。アーメン。

甘木通信

すべてに耳を傾け得た結論。「神を畏れ、その戒めを守れ。」これこそ、人間のすべて。

コヘレト11章13節

「ルター、倉本聰」



先週の日曜日、疲れ切って、帰宅し、ふとテレビをつけると倉本聰さんの追悼番組の「プロフェッショナル 仕事の流儀」が出てきて、つい釘付けされた。そのなかで、執筆中に自分の力を超えた「何か（SOMETHING）、別の力が降りてくる、乗り移る」ような感覚について語っていることが印象に強く残った。この感覚は宗教的なものであり、まさに多くの聖人たちの体験であり、中世から近世を開いた宗教改革者ルターの原点だと思う。ルターはこの神秘を体験し、神秘体験が原点となり、ひたすら牧師として走りぬいた。何か（SOMETHING）、別の力が降りてくる、乗り移たように人間業と思えない牧会のわざ、教育の業、膨大な著作を書き、宗教改革を導いた。

倉本聰さんはその中で次のように言っている。

1. 執筆中に激しい肩こりや不思議な吐き気を伴うことがあり、そうした瞬間に「自分の力を超えた、ものすごいものが書けた」と感じる瞬間がある。
2. 何かが降りてくる・乗り移るための条件として、「技を磨くことは大前提だが、人としてピュア（純粋）であること」を挙げている。

ルターの青年、修道士の時代、ノイロゼーになり、師・シユターピッツに助けられた話は有名で、それは彼が信仰的に純粋ゆえに思い詰める日々だったからです。純粋が宗教改革を生み出しました。純であること、失いたくない。

（甘木日記）土）夜、遅くに甘木に行き、主日の準備。日）オリーブの苗は付いたようだ。聖書の植物を植えよう。聖餐式礼拝。月）今日は病院通い。朝は眼科、昼は内科、CT、血液検査。火）幼稚園を早退し、ホームセンターに幼稚園玄関に飾る大菊を購入にいくがない。水）職員会議、みんながこどもに寄り添いつつ保育計画を立てていることが分かって心安らぐ。木）松崎保育園、甘木教会へ。金）今週は老いを強く体で感じる日々だった。職員に感謝を表し、餡ころ餅、一個をさしあげる。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。 はぐちらない聖人（牧師）もいますが。

土）どうも調子が悪い。動くにも辛い。マッサージへ行く。少々良くなり、休んで、夜に甘木教会に行く。地方の道は夜が暗く、目が弱っているので運転が辛くなっている。来週は眼科に行こう。主日の準備。老いるとは昨日まで元気であっても、いつ変わるかもしれないということを実感。日）秋になり、水撒きも軽くすみ助かった。植えたオリーブの木は付いてきているように思える。オリーブの苗に気（け）をいただき、励まされて庭を掃除を完了できる。庭が清々しい。今月、アーモンドの苗が届く予定。聖書の植物とハーブ類を植えていこう。礼拝が終わり、久留米の役員会で出ようと帰るが、終わっていた。休めという恵みと思い、帰宅して休む。月）朝、眼科に行く。白内障が出ているが年相応ですと。メガネの調整。新しい眼鏡を買わなければならない。Y先生がデザインした入園募集の横断幕を届けに昼に行く。さっそくNさんと先生らが掲示した。なかなかいい。午後からお世話になっている病院に行き、検査を受ける。むくみが気になるが、肺、心臓も大丈夫。腎臓に水泡出来ているが、大丈夫でしょうということ。老化の一言ですべてが片付くと思いつつ、いつもことだが、同じ歳の家内のことが心配なる。大森時代は、立てなくて日赤に入院した。この時は早期退職を考えた。白内障手術したり、久留米に来ては指の筋の手術をしている。夜、柴田愛子さんと研修会の件で電話。保育の話を中心として楽しいよもやま話。火）朝、幼稚園の門に立つが、本調子でなく立っているだけでもきつい。子どもたちの声、いろいろと楽しいことをやってくれる動きに慰められ、元気にされる。家内と夕刻4時に早退。幼稚園の玄関に飾ろうと菊の花の大鉢を買いにホームセンターに行くがなく、蓮華、ミントの種、野菜の苗メダカの鉢を綺麗にする薬を購入する。水）今日も体が重く、だるい。職員会議が終わり、早退しようと思ったが、預かりの子のお迎えが、19時になりそうだと聞き、残る。幸い18時までにあと一人になったので、先生2名いるので任せて帰る。甘木に泊まりに行く気力もなく自宅。市議10期を務めた同級生のN君が亡くなったとYahooニュースに載る。木）松崎保育園、今月の聖句「共に喜び、共に泣くローマ信徒の手紙」の聖書の学び、子ども礼拝、午後から園庭開放の甘木教会へ。その前に園芸屋により両園の秋の花、菊を購入。季節感をいつも感じさせる環境でありたい。マリゴールドが元気に開花している。聖和幼稚園の会計処理。園庭開放で、卒園生の家族が遊びにきてくださった。Kさんが対応してくださり、「藤棚の上を『ジャングルだあ』と喜び、遊んだ」と聞いた。泊まらず夕食を済ませ、温泉に行く。体調が悪く、家内に運転をしてもらおう。早く寝る。金）今週は一気に老いを感じた日々であった。最後に残った先生と園を閉めて帰宅。

